

平成 21 年度公開教学講座「みかぐらうた」の世界を味わう②
第 9 講：「みかぐらうた」と現代

(12 月 25 日)

井上昭夫

まず、おやさと研究所の公開講座の「おわりのはじめ」にあたって、「公開講座」総合タイトル『「みかぐらうた」を味わう』について、所感を述べておきたいと思う。「元の理」においては、親神の「道具」衆を「食べて味わう」という行為が、人間創造の象徴的キーワードになっているからでもある。

生物は飲食と排泄によって生かされる。排泄行為は飲食と同じく、くもよみのみことの守護である。神に食べられた道具衆は、その心をそれぞれ味わわれたのち排泄され、それを栄養素として原初の泥海は、他のもろもろの生物の発生と進化の条件を整えていった。神話としての「元の理」には、このことは言語化されていないが、人間は神の排泄物から創造され、成長したという解釈も成り立つ。それに類似した人間創造説話も少なくない。

モーツァルトは幼児時代から 19 歳になるまで、毎朝自分の排泄物（大便）をこねまわしていたということはあまり知られていない。モーツァルトが、どのような鼻歌を歌い、なにを考え、自分の体内から出てきた排泄物に不思議な感じをめぐらせながら、両手で自分の「大便」をこねまわして遊んでいたのかどうかは、つまびらかではない。彼がわれわれ凡人と違うところは、それを 19 歳になるまで毎朝つづけていたという点にある。

モーツァルトの天才的な作曲と、この奇行の行為の関係性については、生態学がコズモロジカルに音楽という芸術にかぎりなく結びついている証になると考えられる。「元の理」と芸術の関係性を論じるに際して、この点はきわめて興味がそそられる。これは解剖生態学者三木成夫の専門領域であろう。三木は筆者との対談において「元の理」の泥海は「大便」だと指摘した（井上昭夫「生命記憶と元の理」『中山みきの「元の理」を読み解く』）。

ところで、教祖の発声音からなる神言「みかぐらうた」を人間が「味わう」ということは、神のエッセンスを我々人間が「食する」と解釈できる。人間が神の言葉を「食する」ことは、人間が神と同化される、人間が神に近づくということを暗示している。つまり、人間がさまざまな意味で「神の排泄物」の環境下によって成人したと解釈することは、人間は他者救済の「肥やし」になれという暗黙知をもって誕生したという連鎖にわれわれをみちびく。

このように原典に啓示された日常的な言葉を深く思索し、その理の筋道をたどっていくと、たとえば、「みかぐらうた」の一下り目が、正月「肥」の「さづけ」は「やれめずらしい」から始まっているのは、偶然ではないと思われる。それは限りなく自然における微生物、つまり「どじょう」に象徴される働きに繋がっていくからである。また、二下り目の一ッは、「正月踊りはじめはやれ面白い」と歌われる。この二首、つまり「みかぐらうた」の手踊りの始め出しの言葉と手振りは、日本の能学の元祖とされる天才世阿弥が『風姿花伝』^{ふうしかでん}において、不断に「稽古」に専念し、まことの「花」を極めることが、天下の御祈禱

であると考え、役者のあるべき姿を、その芸道思想に示したことを思い出させる。「花が能の命」とされる世阿弥哲学のキーワードは、「生命の躍動が手踊りの命」と言い換えることができるだろう。世阿弥の能面は、かぐら面とも不思議に共鳴している。世阿弥のいう「まことの花」とは、いかなる時と場の「演能」も、花が咲くことを成就しうる能力であることを意味している。ここにおけるキーワードである「花」とは、「演能」、つまり能の演者が、観客に与える感動を意味し、それは「人の心にめづらしき・面白き心」を与えるものであると説かれている。

昔、天理教では、病人の枕もとで「みかぐらうた」を朗誦し、踊ったといわれる。身上者は、手踊りを見ながら「みかぐらうた」の声を聴く。「見舞い」の語源は、病人に舞を見てもらい、舞い手が病人、つまり、身上者の病の治癒を祈願するということにあった。世阿弥の天下の祈禱を旨とする「稽古哲学」も、舞手・芸人の命がかかるといほど厳しいものであった（西平直『世阿弥の稽古哲学』）。

能楽とはちがって、「みかぐらうた」では、農業（種・田地）と工業（大工・普請・やかた）の比喩が豊富に使われている。種・苗代などは、夫婦のシンボル、地天の見立てとなっている。言霊において「肥」は「声」につながり、その意味でも「みかぐらうた」は、「元の理」の通奏低音となっている。「みかぐらうた」における「音声」（パロール）の重要性は、筆記言語（エクリチュール）である「おふでさき」とは異なっている。それはその朗誦において、存命の教祖が発せられた肉声が、先人達の身体言語として血肉化され、現代に継承され、未来永劫に反復されていくことを示している。その意味で「みかぐらうた」は口授であったというのが、私の確信である。その検証と傍証はべつの機会にゆずりたい。

「みかぐらうた」という原典は、人類救済の珠玉の宗教的神楽でありながら、その現代・未来的解釈や裏守護的・思想的解釈とは長い間無縁であった。「みかぐらうた」の釈義が、個々の信仰者の心性還元論に留まっていたのは、現代世界のグローバルな問題に解決の糸口を与えない。従来の「みかぐらうた」解釈といわれるものは、実は解釈ではなく、「表記文字」の説明にすぎないローカルな蓋「扉」に閉ざされているのがほとんどであった。表記言語の辞書的説明や個人的な語りは、ひらがなを漢字化するようなものであり、言語を他言語表記に「転写」しているレベルに過ぎない。「言語的転写」を「概念的解釈」と混同してはならないのである。

「九ッ ここはこの世の極楽や」と教えられ、一方では「六ッ 謀反の根を切ろう」と思召される混沌化する現代世界に向けての思索や具体的行為が欠落しては、いくら「ておどり」の言葉を理解し、その形を正しく学んでも、私たちの世界だけへの祈りは空虚であると批判されても返す言葉がない。正しい歴史感に立つ「みかぐらうた」解釈とは、現在の「世界の鏡」にリアリティーが「映る（移る）」大地に両足をしっかりと置くものであり、過去の事実を羅列し、回想するものであってはならない。温故知新の知新とは、この過去から現代、現代から未来へ私たちの思想が移行・変化・展開していくべき点を突いているのである。

第 222 回研究報告会

「ベルリンの壁」崩壊の背景にあった旧東欧の環境破壊

佐藤孝則

2009 年 11 月 30 日、標記演題で研究報告をおこなった。この報告では、EU を構成する中東欧諸国の環境対策が「ベルリンの壁」崩壊前はどのような状況だったか、とくに中東欧諸国の大気汚染、水質汚染、土壌汚染、自然破壊の四つの視点から紹介した。

EU に属する中東欧の旧社会主義国は、「ベルリンの壁」崩壊（1989 年 11 月 9 日）後、雪崩を打ったように社会主義体制から離脱し、EU への加盟を急いだ。ソ連を頂点とする社会主義体制からの脱却を心待ちにしていた中東欧の国民が、公害や自然破壊といった環境問題の現状に不安と不満を抱いていたことがその背景にあった。それは、1980 年代初頭、ハンガリーで起きたダム建設にともなう大規模な建設反対運動と、1989 年に東ドイツ国民をハンガリーからオーストリアへ逃亡させた「ピクニック計画」に象徴される。

第 223 回研究報告会 「おかきさげ」の解釈について— 特に「これまで運ぶ尽す一つの理は」をめぐって

松山常教（天理教校）

標記研究会が 2009 年 12 月 4 日（金）におこなわれた。松山氏は、おさづけの理を拝戴する時に頂く「おかけさげ」の後半部分に注目し、「これまで運ぶ尽す一つの理は、内々事情の理、めんへ事情の理に治め」の解釈を問題として発題した。この論は、「誠」についてのお言葉に続いて説かれ、30 歳以上の人に対しては、最後のお言葉として説かれているものである。

まず、「おかきさげ」と同様の内容を持つ「おさしづ」を頂いているのは、講元、周旋の立場にあった人がほとんどであり、問題の文言中「運ぶ尽す」は大きく「互いたすけあい」を意味しているとした上で、先行研究として①植田栄蔵「お書下げ私解（3）」、②中山慶一「講話『おかきさげ』について」（①②は「これまで」の解釈は無い）、③中山慶一・芝太七「対談『おかきさげ』を読む」、④山口渡「『おかけさげ』の点描」を取り上げた。次に「おさづけ拝戴のおさしづ」において、「おかきさげ」の上

記箇所に相当するお言葉がどのような文脈において、どのような意味で論されているかを該当する 38 の「おさしづ」を 4 グループに分けて検討した。

その結果、これらの「おさしづ」における上記の論は、「おかきさげ」と同様に説かれていること、その位置で説かれる「これまで」は、その前の部分で論されるお言葉全体を指していること、「誠の心」は根本教理である「かしの・かりもの・の理」の実践における要となるもので、たすけ一条に尽くし運ぶための要点となる教えであることが明らかにされた。（文責：堀内）

（8 頁からの続き）

づこうとし、護衛官のジャーニによって取り押さえられた事件。3 度目は今回の 2009 年 12 月 24 日であった。スザンナは、今年は自分の思いを実施し成功したのだ。

ローマ法王の横を歩いていたエチエラライ枢機卿（天理教のよき理解者でもある）はローマ法王を守るべく、ローマ法王が倒れる時、その前に飛び込んで法王を守った。そのお蔭で、ローマ法王は倒れたが床に打ち付けられてはいない。逆に枢機卿は大腿骨を骨折してしまった。その手術は 26 日に行われた。

この事件には背後関係がないことが分かり、ヴァチカン側は訴訟を起こさないことを決定。また、ローマ法王を守るために、サン・ピエトロ広場や教会の中でも防弾ガラスの張られた車に乗って移動することが検討されたようだが、これは法王と信者を著しく隔ててしまうものだとということで却下された。ローマ法王は常に信者とも、いつでもどこでも、握手できる姿勢を保つため、あまり距離をおいてはいけないうだ。例えば、法王は赤ん坊などがいれば、抱き上げて、その赤ん坊の頬に接吻することもある。

翻って、天理教の場合はどうか。朝夕のおつとめの時に、真柱様は他の先生方の先頭に立って歩かれ、神殿へまた教祖殿へと向かわれる。その時に警備している青年を見受ける。保安係なのか、本部の青年なのか、私は知らない。ともあれ、その警護の人数は少なすぎるように思える。いつ、どこで何が起きるともわからない。用心に越したことはない。

— お 知 ら せ —

天理大学 おやさと研究所
平成 22 年度公開教学講座

「現代社会と天理教」(1)

世界が大きく激動している今日、私たちの価値観や身の回りの生活もしだいに変化し、いつのまにか多様な価値観が生まれてきました。しかしその価値観は、ややもすると利己的な価値観となっており、「我さえ良くば、今さえ良くば」の風潮を拡大・助長する危険性をはらんでいます。そのような現代社会の中で、私たちが日々考え行動する拠り所は、常に天理教の教えに基づくことは言うまでもありません。

この講座では、「現代社会と天理教」というテーマのもと、2 年間にわたって天理教の教えに基づく生き方、行動のあり方を、現代社会における具体的事例の中から考えていきたいと思えます。

講座は、平成 22 年 4 月から 11 月まで（7 月を除く）の毎月 25 日、午後 1 時から 2 時 45 分にかけて開講します。会場は、道友社 6 階ホールを予定しています。

多くの皆さまのご参加を、お待ちしております。

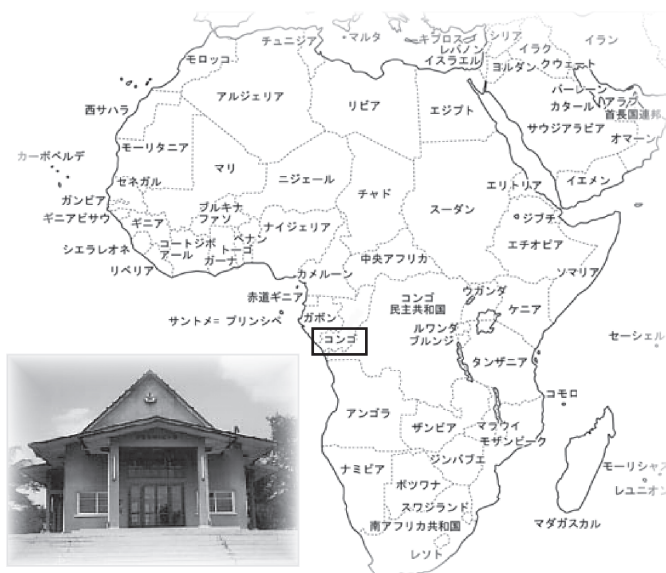
第6回 伝道フォーラム

入場無料・来聴歓迎

「コンゴ伝道における諸活動」

コンゴ共和国では、1964年の教会設立と同時に開始された「憩の家」診療所の医療活動の他、柔道や日本語教室、また鼓笛隊といった活動が活発に行われてきました。現在では、それが教会が運営する託児所から幼稚園、小学校までの教育活動や読み書きができない人のための識字教室などに繋がっています。

そこで今回は、コンゴ伝道の上でこれまで展開されてきた医療や文化、スポーツ、教育などの諸活動に焦点を当て、海外伝道、とりわけ開発途上国と言われる地でのさまざまな布教伝道のあり方について考えていきます。

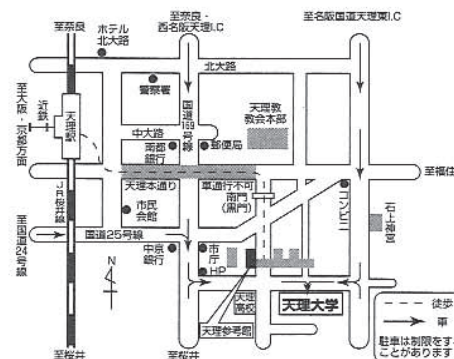


日時：平成22年2月26日（金）午後1時から

場所：天理大学研究棟3階第1会議室

主催：天理大学 おやさと研究所

後援：天理教海外部



講演者と演題

谷 徹也：「コンゴの奥地布教活動について」

コンゴブラザビル教会ルカク布教所元布教所長（昭和43年7月～昭和46年12月）

柳瀬由利子：「看護師の体験を通じて」

医療班第10次隊員（昭和46年4月～昭和47年3月）

森 洋明：「地域社会のニーズに応えて」（鼓笛、コーラス、学校運営等の活動から）

コンゴブラザビル出張所元所員（昭和61年6月～平成元年9月）、コンゴブラザビル教会顧問

問い合わせ先：

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050 天理大学 おやさと研究所

FAX 0743-63-7255 E-Mail: oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

グローバル天理

第11巻 第2号（通巻122号）

2010（平成22）年2月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 井上昭夫

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan